

中標津町郷土館だより

第12号

発行 平成9年10月31日
発行所 中標津町教育委員会
標津郡中標津町丸山
2丁目22番地
電話 01537-3-3111

～古文書に出てくる中標津の風景～



【図1：「ケ子カ」】

川のすぐそばには建物が1軒、そして右側には人が2人が歩いています。いかにも古そうなこの絵は……？

この絵は江戸時代の安政4年（1857年）に北海道内を踏査した目賀田帯刀という人が明治4年（1871年）に描いて外務省に提出したもののうちの1枚です。

絵の右上には「ケ子カ」とあります。これは計根別の語源となった「ケネカ川」のことですが、この絵のモデルとなった場所は、計根別市街地から近くにある、標津川とケネカ川の合流地点付近であると思われます。

江戸時代の（今から140年前）の中標津の風景を知る貴重な手掛かりの一つと言えるでしょう。

下の2枚の絵は、「ウコフトル」という場所（現在の「西上標津」付近）から見た西方向と北方向の風景ですが、絵をつなげてパノラマ写真のようにしています。

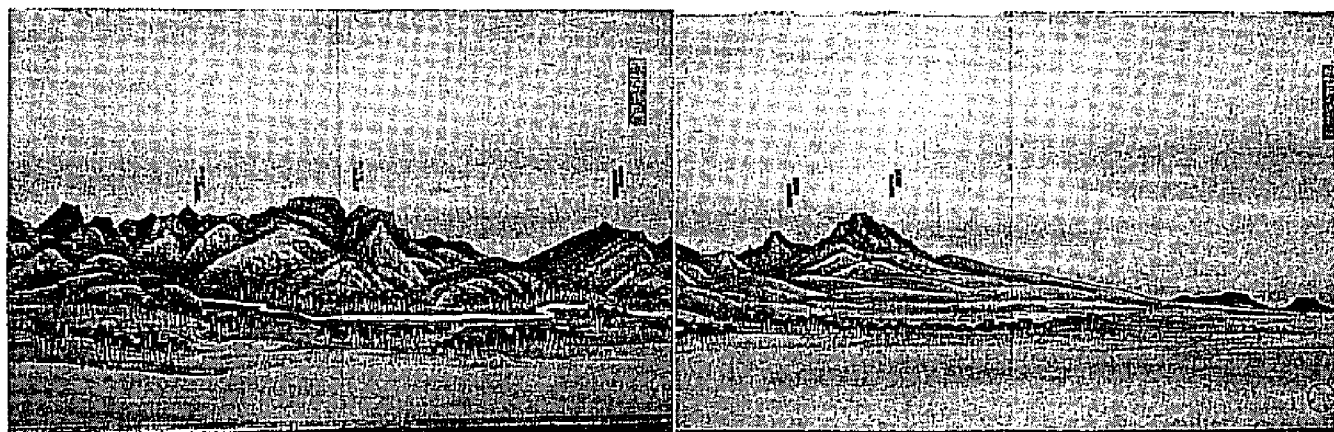


【図4：「ウコフトル」から西方向の風景】

左から「申十七分、女垂寒岳」「申二十二分、男垂寒岳」「酉十九分、西別岳」。右には「ワッカオイ山道」とあります。

申、酉は方位をあらわします。

「女垂寒岳」は「雌阿寒岳」、「男垂寒岳」は「雄阿寒岳」のことです。摩周湖の「カムイヌプリ」はちょうど「西別岳」の裏に隠れているようです。



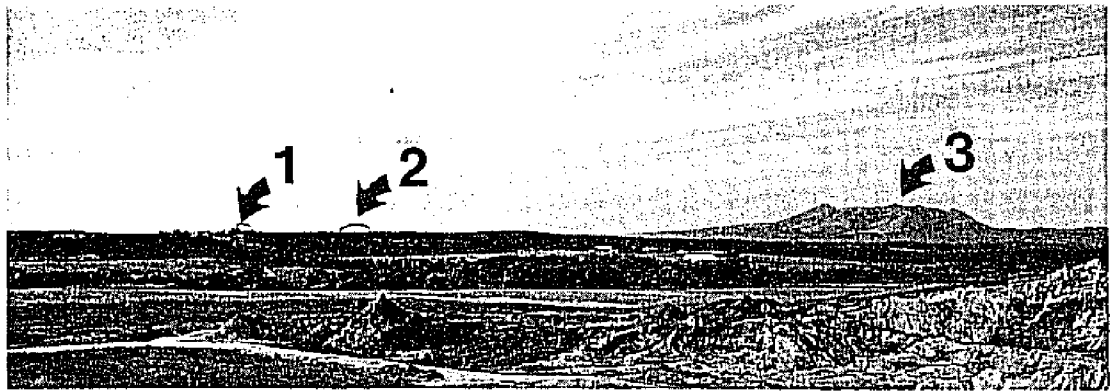
【図5：「ウコフトル」から北方向の風景】

左から「子一分、シャリ岳」「子四分、標別岳」「丑十九分、チウルイ岳」「丑五分、サキムヒ岳」「丑五分、ウナペツ岳」とあります。山の前は「標津川」でしょうか。

山はそれぞれ「シャリ岳＝斜里岳」、「標別岳＝標津岳」、「チウルイ岳＝忠類岳」、「サキムヒ岳＝崎無異岳」、「ウナペツ岳＝海別岳」と思われます。しかし、この図の説明は現在と少し違うようです。例えば、

- ① 斜里岳と標津岳の位置関係が逆転している。
 - ② 忠類岳と崎無異岳という山の名は現存していない（正式名称、俗称含む）。
 - ③ 現在のウコフトル付近から海別岳は見えない位置にある。
- ※ 忠類は標津町、崎無異は羅臼町の川の名前に由来を持つアイヌ語地名です。

そこで、ウコフトルのあったと思われる場所へ行って写真を撮影してきました。前ページの絵と見比べてみましょう。

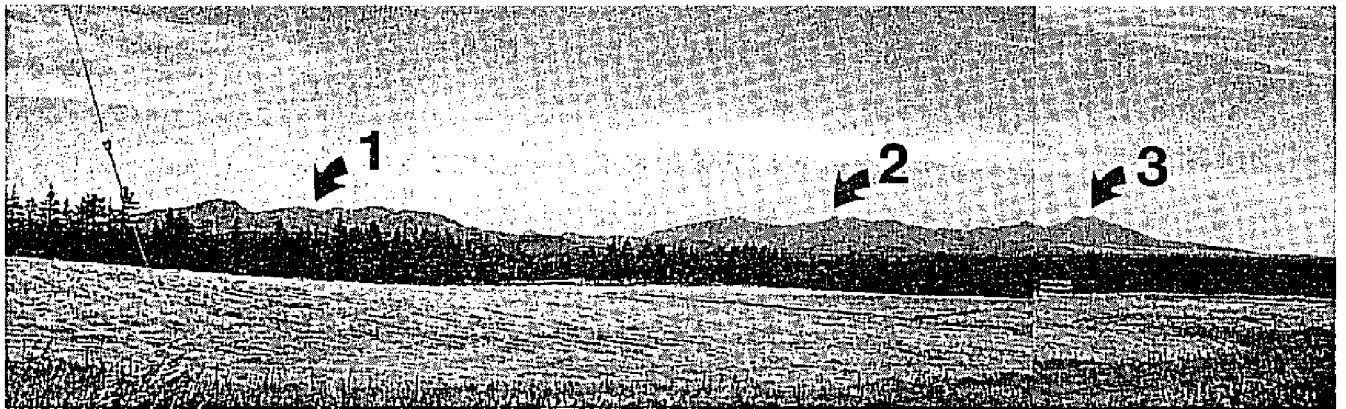


【図6：「ウコフトル」付近から西方向の風景】

52線（一般道々養老牛計根別停車場）と北20号の交差している場所で撮影しました。ちょうど木に隠れてしまいましたが、左側から1が「雌阿寒岳」。2が「雄阿寒岳」で、少し離れた3が「西別岳」です。

前ページの図4と同じで「カムイヌプリ」は「西別岳」の陰になっていて見えません。

※ 「雌阿寒岳」と「雄阿寒岳」は分かりづらかったので輪郭をかいています。



【図7：「ウコフトル」付近から北方向の風景】

上の図6を写した場所から北方向は、山並みが樹木にさえぎられてしまうため、51線北20号から撮影しました。

前ページの図5と、この図7を見比べると、ほぼ同じ場所から見たものであることが分かります。左から1が「斜里岳」。山並みが少し凹んで2が「俣落岳」、3が「武佐岳」です。

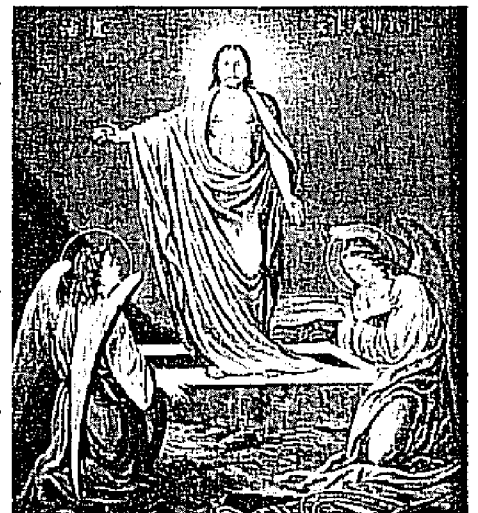
今回使用した図は、北海道大学附属図書館北方資料室の『北海道歴検図根室州 下』ですが、この本にはこれらの絵を含めて、中標津町内の風景が8ヶ所14枚が描かれていますので、次号以降も紹介していきたいと思えます。

イコン画家・山下りんの生涯

上武佐のハリストス正教会には、山下りんの描いた十二大祭図とキリスト復活の図、ハリストス、マリアの二聖像があり、これらを聖像画（イコン）と言います。イコンはキリスト教画の中では特殊な位置にある神聖な存在で、その前で折りを捧げ、香をたくといった敬虔(けいけん)な崇拜の対象となっています。武佐の教会にあるイコンは、明治20年に建てられた根室ハリストス教会にあったもので、大正初期に閉鎖されたおり、信者の伊藤繁喜氏が保管していました。伊藤氏は大正4年に上武佐に移住し大正8年に他の信者と共に現在地に最初のハリストス教会を建て、保管していたイコンなどを用いて教会の儀式を信者同志でおこなっていました。イコンには制作年代や作者名がないのが普通で、武佐のイコンにもそれらはありませんが、ニコライ堂の証があり、山下りんの作とされています。

1. 「山下りんの生い立ちと上京まで」

山下りんは安政4年（1857年）5月25日に常陸国（茨城県）笠間に生まれました。父は笠間藩牧野家の家臣でしたが、7才のおりに亡くなり、その後明治の廃藩置県を迎えました。下級士族の家計は容易ではなく、りんには農家へ嫁に行く話しがでましたが、そんな運命に甘んじる事ができない勝気なりんは、明治5年に家出し上京します。



【ハリストス復活】

一旦は連れ戻されますが翌6年には絵の修業のため再び上京します。この頃の事を、りんは「余 生来画を好むしかし郷里に師無くむなしく過ぎる ようやくにして明治六年妾の十七歳の時出京」と書き記しています。

2. 「工部美術学校時代・ハリストス正教入信の頃」

はじめは浮世絵を習いますが、明治8年からは中丸精十郎に洋画を学びました。その当時の東京は明治維新後間もなくで、世情も安定しておらず、洋画も暗中模索の時期でした。工部美術学校がはじめて日本に開校されたのは明治9年で、女子部は翌10年からでした。相当困難な試験がありましたが、りんを含めて6人の女子が入学しました。りんは月謝を旧藩主から出してもらい、現在の文部省前にあった美術学校へ本所の親戚の家から6キロの道を和服下駄履きで通い学びました。

明治11年にニコライ師創設の駿河台にあったハリストス正教会に入信し、聖名イリナを授けられました。ニコライ師は大聖堂建設の計画があり、そのために日本人でイコンを描ける人を養成しようとしていました。ニコライは山下りんをロシアへ留学させイコンを学ばせることにしました。宗教画家としての山下の生涯はここに決まり、明治13年

12月13日ロシアへ向けて出航しました。

3. 「ペテルブルグ女修道院・エルミターージュ美術館時代のりん」

船と汽車の長旅を終え、最終目的地ペテルブルグに着いたのは明治14年3月16日のことでした。その後はギリシア正教の聖画の模写と祈りの日々を過ごします。後にエルミターージュ美術館を見学したりんは「実に高大の画には驚き入る物なり」とイタリアルサンスの絵に感動しています。その後エルミターージュ美術館に通学しイタリア系の絵画に魅せられてギリシア正教の形の定まった聖画と、りんが描きたい作品との差があったようです。明治16年3月7日、2年間のロシア留学を終えて帰国の途につきました。

4. 「ニコライ堂でのイコン制作」

帰国後はニコライ堂の一画にアトリエを与えられ、信仰とイコンの制作に従い、一生独身で通す生活を送ったのでした。ニコライの布教が軌道に乗っていた時期であり、教会が各地にでき、イコンの需要はいくら描いても足りない頃でした。帰国後終生イコンを描いて洋画の世界に行かなかったのは、日本にはロシア正教のイコンの伝統がなく、自分なりの工夫を加える事ができ、また「日本には日本人によるイコンがあるべきだ」というニコライの卓越した指導があったからだと言われています。

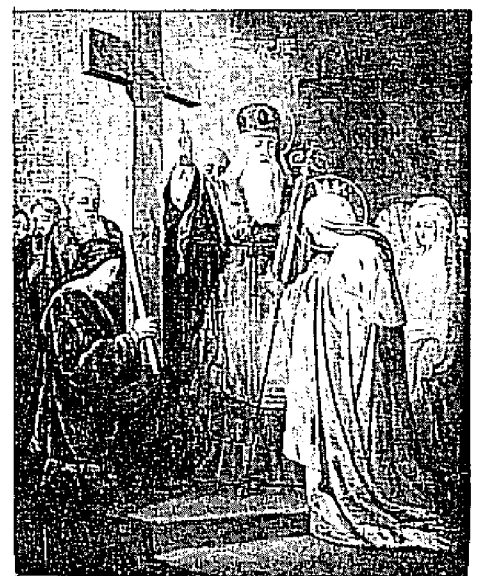
山下りんのイコンは足利ハリスト正教会、北鹿（秋田）、札幌、須賀（千葉）、釧路、函館、盛岡、上武佐ハリストス正教会他に残っています。しかしまだ明らかになっていない作品もあり、今後の研究が待たれます。

上武佐ハリストス正教会には①主の昇天、②聖神降臨、③主の顕栄、④至聖生神女之就寝、⑤至聖生神女之誕生、⑥聖架之挙栄、⑦至聖生神女之進堂、⑧ハリストス誕生、⑨主の迎接、⑩主の入城、⑪聖生神女之福音、の十二大祭図、とハリストス復活の図、ハリストス、マリアのイコンがあり、明治中期から大正初期の作と推定されています。

5. 「晩年のりん」

笠間に帰郷後のりんは目の病にかかったこともあってか、絵筆をとることはありませんでした。菜園で野菜を作り、毎日2合の酒を楽しむ悠々自適の毎日でした。

昭和14年1月26日、83歳の天寿をまっとうして安らかに世を去りました。幾多の困難にも屈せず、女性の身で絵一筋の道を貫き、信仰とイコン画に生涯を捧げた山下りんの作品を皆さんも是非ご覧になって下さい。



【聖架之挙栄】

～参考図書～

小田秀夫著『山下りん』、『中標津町史』（中標津町役場史料室 きくち せい）

中標津町の地名

・当幌（とうほろ）

当幌川から字名をとったもので、もともとアイヌ語地名のひとつです。

この地名の解釈については、

- ①『永田方正地名解』〔永田方正〕
L、「沼川」（ホロは川の意味）
- ②『アイヌ語地名解』〔更科源蔵〕
L、「沼川」（野付湾を沼と解釈）
- ③『萬覚帳』〔加賀伝蔵〕
L、「川有、沼おふき也」
- ④『東蝦夷日誌』〔松浦武四郎〕
L、「沼多き故に沼川という」

と記載されています。つまり「トウホロ」の「トウ」は「ト・トー＝沼」という解釈で共通しているのですが、「ホロ」を「ポロ＝大きい」とするか、「オロ＝～の中、～の所」とするか、「ホロ＝川」の意味にするかで解釈も違ってきます。

当幌川は中流から下流にかけて湿地は多いのですが、沼というほどのものは見あたりませんので、野付半島に囲まれた湾を沼として「沼の・所の・川」と解釈したのではないかと考えられます。



（標津線廃止前の当幌駅：昭和55年撮影）

中標津町内で 見られる蝶（8）

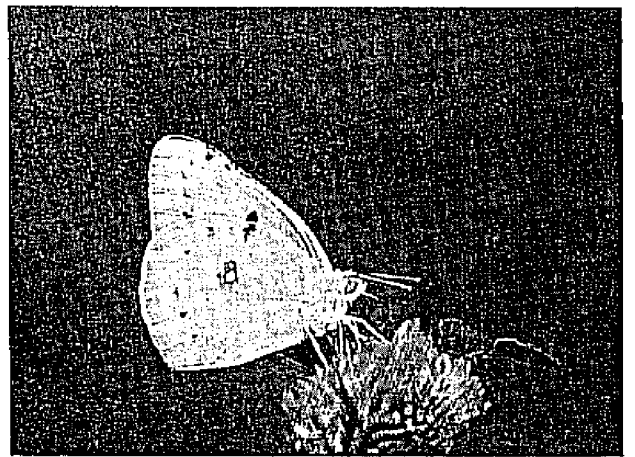
・モンキチョウ（シロチョウ科）

この地方はもとより、全国の平地から山地までマメ科植物のある草原で見ることができます。

オスは名前のおり黄色い翅を持ち、メスは白色型と黄色型がありますが、北の地方ほど白色型の出現が多いそうです。オス、メスとも草原上を低く飛びまわり、シロツメクサやクサフジなどをはじめ多くの花を訪れます。

道内では5月頃～10月頃まで見られますが、初夏と晩夏の2回発生のピークがあるので、年3、4回発生すると考えられています。冬をどういう状態で越すかは不明な点もありますが、おそらく中齢幼虫で越冬するものがほとんどと考えられています。

越冬した幼虫は雪融け後すぐに食べることでできるツメクサ類に依存していると考えられています。



—参考文献—

- ・『北海道の昆虫』、北海道新聞社、1979
- ・『野外ハンドブック2・蝶』

山と溪谷社、1986

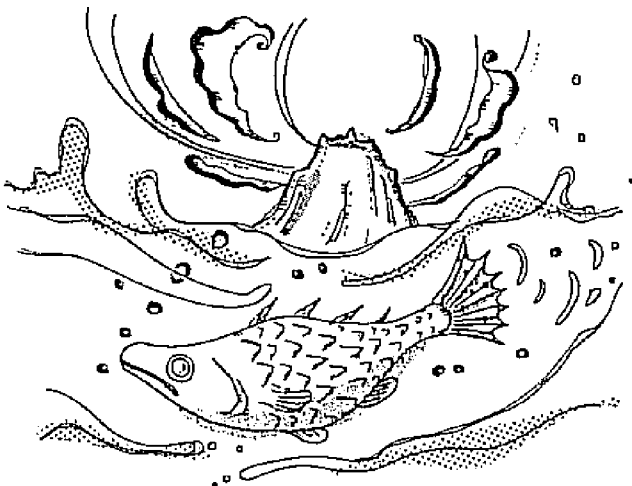
！道東地方のアイヌ伝説！
「屈斜路湖の
大アメマス」

北海道の大きな湖には巨大魚の伝説が多くありますが、屈斜路湖にも巨大魚の伝説が残っています。

昔、この湖には巨大なアメマスが住んでいました。頭は岩のように水上につきだし、尾は釧路川の出口あたりに揺れ、背びれは湖上にそびえ、腹びれは湖の底の石にすれているという大きさでした。

そのため、このアメマスがひとたび暴れだすと地震が起こり、湖を渡る舟でもあると波を起こして転覆させ、退治に行った神々も寄せつけないという恐ろしい魚でした。

ある時、この事を知った英雄オタシトングルは、銚(もり)をもってこの大アメマス退治に出かけました。オタシトングルは、大アメマスの満月のような目玉を銚で貫きました。目玉をやられた大アメマスは、大地が張り裂けんばかりに暴れ狂いました。あまりの力に銚の柄にむすびついた縄をしっかり握っているオタシトングルも水中に引



(イラスト：佐瀬乃布子)

きずり込まれそうになります。オタシトングルは必死になって近くにあった山にその縄をむすびつけました。しかしあまりにあばれるので、とうとう山が抜け、湖の中にくずれ落ちてしまいました。そのため大アメマスは山の下敷きになり動けなくなってしまいました。

その山が現在の中島であり、引き抜いた跡に水がたまったのがポント（ポン・ト＝小さな沼）という沼になったそうです。現在でもこの地帯で時々地震が起こるのは、山の下敷きになった大アメマスがまだ死にきれずにあばれるから起こるのだろうと伝えられています。

そういえばクッシーとよばれる恐竜のような怪物が屈斜路湖で目撃されたことがありましたが、もしかすると...

【『アイヌ伝説集』更科源蔵編著、北書房版を参考にしました。】

— 編集後記 —

「屈斜路湖の大アメマス」の原稿を書いた2、3日後に、屈斜路湖でクッシー目撃！？という記事が新聞に掲載されました。あまりにもタイムリーな出来事に少々ビックリ！。

一時期この湖には毒ガス弾が沈められているということで随分騒がれましたが、どうせ騒がれるなら夢のある話題の方がいいですね。

お忙しい中、ご執筆いただいた皆様に厚くお礼申しあげます。

(山宮記)